

はじめに

塩那森林管理署は、栃木県の県北地域を所管し庁舎は大田原市にあります。歴史的には、明治22年(1889年)の栃木大林区署大田原派出所（翌年に大田原小林区署に改称）の設置に溯りますが、幾多の変遷を経ながら平成13年に矢板営林署を廃止・統合し、現在の塩那森林管理署となっています。この「塩那（えんな）」という名称は、那須郡、塩谷郡を総称するものと聞いていますが、「那須」と「塩原」を指すものとか諸説あるようです。

管内の国有林は約4.1万ha、北西部の高原山から那須岳にかけての山岳地帯と東側の八溝山地に分布し、大田原市の他、那須塩原市、矢板市、那須烏山市、塩谷町、那須町及び那珂川町の4市3町にわたります。

森林事務所は須賀川、馬頭、伊王野、那須、矢板（矢板・玉生）、中塩原（中塩原・塩釜）の6事務所があります。

管内は大別すると、東側の古くからの林業地である八溝山地、北西部にそびえる那須岳から大佐飛山地にかけての国立公園や保護地域を主とした地域、西部にある高原山地域は戦後の東京の復興を支えた林業地であり、まさに関東の森林の縮図のような様相です。

今回は本稿の機会をいただき、これらの国有林を若干の思い入れも含めて紹介させていただきたいと思います。

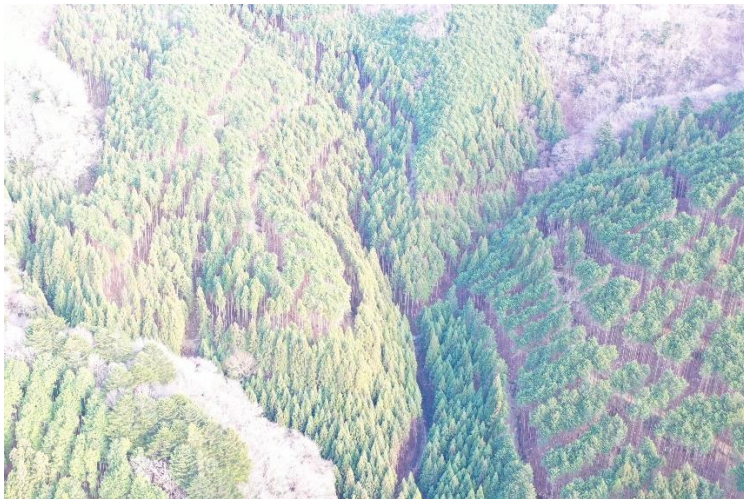


塩那森林管理署 管内概観図

1. 八溝の美林

まず、管内東側の八溝山地に展開する国有林は人工林率 8 割に近い林業地帯で、スギ、ヒノキの良材を産しています。県内外の周辺地域には大規模製材工場が立地し需要も旺盛で「八溝材」としてのブランドも浸透しつつあり、棚倉署、茨城署の管内も含めて関東局のドル箱などとも言われますが、そこはあえて美林と言いたいところです。八溝山系の穏やかな山容と豊かな表土により特にスギの生育は良好で、条件の良い個所では上方成長も良く通直な林分に育っています。国有林はもとより民有林でも地域の篤林家による美林が多く、近年は森林組合等の尽力もあり集約化による間伐や皆伐再造林も積極的に進められているところです。国有林では生産事業による列状間伐を主体に進めているところであり、民有林、国有林合わせてこの地域の持続的な森林利用を進めていくのが今後の課題でしょう。

前掲の恵まれた条件の他に、この地域には今までニホンジカの生息が無かったことから、他の地域と比べて造林地での獣害対策の必要が無いというメリットもありました。近年では、北西部からのニホンジカの侵入がみられはじめていますが、まだ造林地に被害を及ぼすまでには至っていないのは幸いです。今後のニホンジカの生息域の拡大に備えて、塩那署では隣接の茨城署、棚倉署と合同でモニタリングと捕獲（八溝山地におけるニホンジカ生息調査及び誘引捕獲事業）を行っているところです。この取組が成果を上げれば、生息域拡大の先端地での拡大対策の好事例となると期待しているところです。



国有林での列状間伐

2. 那須連山とその周辺

日光国立公園の一角を占め宮内庁的那須御用邸があり、ロイヤルリゾートとして知られる那須高原が裾野に展開する那須地域は、日光国立公園の一部として温泉や登山を楽しみに訪れる人が多い地域でもあります。主峰の茶臼岳をはじめ登山道も、地元の市町、栃木県、環境省や山岳救助隊等の協力により比較的良好に整備されており、毎年、森林管理署も参加しての清掃登山や合同登山道整備も行われ安全な利用への取組が継続されています。

山麓域は標高に合わせて、カラマツ、ヒノキの植林も行われています。また、黒磯駅から那珂川にかけた晩翠橋を渡り左折した日光国立公園の入口である那須街道（県道 17 号線）沿いには随所にアカマツ林が残り、そのうち国有林では市街地のそばに約 2.5 km にわたって 100 年生と言われるアカマツ林があります。戦後の那須野が原の開拓を免れた地域のシンボルとして親しまれてきた那須街道アカマツ林ですが、近年はマツクイムシ被害等により、30 年前は 2 万本と言われていたアカマツも現在は約 7.1 千本となり、広葉樹への遷移も進みつつある状況です。森林管理署としても松枯れ対策として地上散布、樹幹注入による防除や被害木の伐倒駆除を行っているところですが、アカマツの美林を守るために地域住民や NPO によるボランティアによる次世代のアカマツの植樹や育林が行われています。

特に、地元の那須町立高久小学校では創立 150 周年の取組として、松ボックリからの種子を採取し、苗木を育てて卒業記念の植樹を行うという取組も始まりました。



那須岳での合同登山道整備の様子



那須街道アカマツ林とヤマユリの花

3. 大佐飛山地生物群集保護林

大佐飛山群、あるいは黒滝山群、または男鹿山塊と紹介されることがあるこの山域は知名度も低めですが、令和元年6月の「署長が語る」では、当時の山口署長がこの主峰大佐飛山を「栃木県で一番遠い山」と紹介されています。山口署長からは小職の着任にあたって「是非登るように」とお薦めいただき、今年の春に山行を試みました。残念ながら力至らず雪の天空回廊手前で引き返し、残りは来シーズンのお楽しみに残しておくことになりました。というわけで大佐飛山については令和元年6月の「署長が語る」をぜひお読みください。

途中行程でも稜線に広がる雪の回廊の両側に展開するコメツガの樹林帯は見事で、なるほど生物群集保護林、自然環境保全地域の規制がかかる深山にふさわしいものでした。

さて、今なお人を寄せ付けず原生的な森林を保つ大佐飛山群ですが、30年前にはこの山塊を抜ける山岳道路を通す計画もありました。昭和37年に構想されたいわゆる塩那道路は、難工事であったと聞いていますが、パイロット道路が昭和46年に開通後、自然保護や費用対効果の疑問視から昭和57年には中間部分の工事が凍結され、平成17年に国有林への返地にむけた植生回復を行うこととなりました。現在は今後撤去される構造物がいくつか残るものの、廃道をたどるのも困難な状態と聞きます。そしてこの山域は今なお遠い山として貴重な自然を残すことになったとも言えますが、それにしても時代を感じる話です。



大佐飛山地生物群集保護林

4. 高原山とその周辺

高原山は矢板市、塩谷町のシンボリックな山として愛される山でもあり、令和6年の高原山山開きでは、高原山を擁する塩谷町、矢板市、那須塩原市、日光市の首長がそれぞれの市町域の登山道から登頂し、頂上で「サミット」が行われました。当然、小職と日光森林管理署長も参加しました。

高原山の山麓は、つつじが美しい八方ヶ原やおしらじの滝に代表される溪谷、名水で名高い尚

仁沢があり多くの方に親しまれています。

また、スギ、ヒノキの人工林も多くその資源量からも今後の利用が期待されている地域でもあり、「たかはら材」のブランド化が進められています。矢板市では令和 3 年に「矢板市林業成長産業課推進アクションプログラム」がまとめられ、令和 5 年には「矢板市森づくり条例」が施行され、「森づくりアクションプラン」作成されるなど、地域の木材産業界とともに伐採、再造林サイクルの実現やまちづくりと一体となった森づくりへと取り組まれています。

大規模製材工場を擁し、首都圏という消費地に近いという立地からも、林業地としての期待される地域であり、国有林としても今後の木材需要を見据えながらの協力が求められていると言えます。

終わりに

我が署の自慢は多くあるのですが、概況のみを紹介させていただきました。保護林やレクリエーションの森を抱えつつ、一方では林業の盛んで民有林も意欲的に施業を行っている地域です。で国有林としても常に新しい技術や考えに対応しながら、刺激的な仕事ができる署であると感じています。